二人の「弱者」の交錯

――1930年代における竹内好・武田泰淳の中国体験を中心に――

朱　　琳

要　旨

1934年、竹内好・武田泰淳・岡崎俊夫などを中心とする中国文学研究会が発足した。その翌年から、約10年も停刊せずに刊行されたのは、機関誌の『中国文学月報』（『中国文学』）である。そして、1937年～1939年の間、竹内好は学生として、武田泰淳は兵士として、同じ時期に中国に滞在し、本誌に数多くの現地報告を掲載した。本稿は、これらの現地報告を中心に、まず、二人の見た異なる「中国像」を考察し、それに対して、それぞれがどのような自己認識を形成したかを明らかにした。また、その異なる「中国像」の底流に、実に「弱者意識」の交錯が存在することを究明した。

キーワード：　竹内好 ／ 武田泰淳 ／ 現地報告 ／ 中国認識 ／『中国文学月報』

一．はじめに

1934年に竹内好（たけうちよしみ）・武田泰淳（たけだたいじゅん）・岡崎俊夫によって設立された中国文学研究会[1]（以下「会」と省略）は、近代中国文学を研究する日本最初の研究団体であり、古典研究を主体とした戦前の中国研究においては、異色な存在であった。その機関誌『中国文学月報』は、当初学会誌から出発したが、のちに、竹内の提案した「会」の改革、および本誌の影響力の拡大に因って、60号から『中国文学』と改題し、生活社から一般雑誌として発売することになった。しかし戦時色の濃い1943年初、「会」は解散し同年３月に第92号をもって終刊となった[2]。

本誌は、同時期の代表的な総合雑誌である『文学界』『改造』に比べると発行部数も少なく、頁数も12頁前後と小規模な月刊誌に過ぎなかった。ただ本誌編集の中心的存在であった竹内好は本誌の特徴について、

> 我々が小さいながらもこの月報を刊行してゐる理由の一つは、発表機関の極度に少い我々の学界のために、自由に意見が吐ける天地を少しでも拡げたいが為であります。（略）第一に自ら卒直に談りあふ習慣を育て、第二に、ヂャナリズムに對して我々の當然享くべき席割を要求したいと念ふものであります[3]。

と述べている。つまり本誌は、中国に関して自由に学術的な意見を語り合える場であるとともに、学会誌の枠を越えたジャーナリズム的な役割を担う気概も滲ませている。そして竹内が述べた特徴の通り、本誌で活躍した若手知識人は、のちに戦後の日本における中国認識の形成に大きな役割を

果たすこととなったのである。

本誌の内容には、多種多様な分野が含まれており、それに関する具体的な紹介は、すでに拙稿「『中国文学月報』から見た近代日本知識人の中国文学認識―大衆重視の視点から―」[4]で触れたため、本稿では省略する。その上で筆者が注目するのは、1938年～1942年に掲載された「現地報告」の記事である。これは竹内好、武田泰淳、飯塚朗、実藤恵秀などのメンバーが中国へ渡航したのを機に、彼らが本誌へ寄稿した報告である。これらには彼等の中国文化を目の当たりにした感動と憧憬が綴られる一方、時期を同じくして勃発した日中戦争によって戦火に焼かれた悲惨な中国の現状についても言及され、「会」メンバーの複雑な心情が事細かく記録されている。そのためこの現地報告は、時代に翻弄された日本知識人の苦悩や葛藤を知ることの出来る一級の資料として高い価値を持つ。紙幅の都合もあり、本稿は「会」の中心的人物である竹内好と武田泰淳による現地報告に範囲を限定して考察することとしたい。筆者は、現地報告を通して、彼らが違う身分によって、それぞれ異なる「中国像」を形成し、また、その背後に異なる視座によって構成された「弱者意識」が存在することを証明したい。

竹内好と武田泰淳の現地体験については、すでに先学によるいくつかの成果が存在する。例えば、竹内好について、幼方直吉氏の「北京・上海における竹内好の生活とその意味」[5]、武田泰淳について、安田武氏の「武田泰淳の文学とひとつの謎―その戦争体験について―」[6]が挙げられよう。しかし、この類の研究は、竹内好と武田泰淳の現地体験を全く個別の問題として扱い、「会」の同人でもあった二人の関係について、その多くが等閑に付されているというのが現状である。竹内好と武田泰淳との関係を取り扱った研究としては、大原祐治氏の成果[7]が挙げられる。大原氏は、本誌における竹内好と武田泰淳との「対立―盟友」関係を考察し、武田は時に竹内と対立していたが、それは竹内の言動の否定ではなく制動的な役割を果たしたのだと指摘している。また、渡邊一民氏は、戦争中の両者の体験も含め、二人の戦前から戦後までの関連性を探求し[8]、二人の関係を、「中国文学研究会のなかで、竹内が短兵急に新しい問題提起をおこなう一方、武田がつねに一歩さがって多様な角度から検討する複眼的視座を守りぬいたこと（略）、竹内を表とすれば武田が裏というこのかけがえのない関係は、ふたりの死までつづくのである」[9]と主張した。ただし、この類の研究において、時系列による史料整理が十分行われたとは言えず、戦時中における二人の思想的な相互作用に関して、再検討する余地があるのではないかと考えられる[10]。

竹内と武田は、一人は留学生として、もう一人は兵士として同時期に中国へ渡り、全く異なる「中国」を見ることとなる。そして1939年に帰国した二人は、それぞれの中国研究を再開するが、彼らの中国認識は、かかる現地体験の差違から、しばしば対立する一方、時には深く連帯するようになったのである。そのため筆者は、関連史料を再整理するうえで、先行研究では論じられることの少なかった二人の中国観の連帯性に着目し、『中国文学月報』（『中国文学』）に反映された二人の主張・心境を比較考察する必要があるのではと考えている。これによって、帰国後、一見方向的に正反対する二人の中国研究の再出発の裏に、どのような共通点が存在するかを明らかにしたい。

二．竹内好と武田泰淳にとっての二つの「中国」

(一)　北京の長閑：竹内好の戦時下留学

竹内好と武田泰淳が見た、異なる「中国」とは果たしてどのようなものであったか。二人の事跡をそれぞれに整理し、検討を試みたい。

竹内好は、1931年東京帝国大学支那文学科に入学し、その後、大学時代から終戦まで、留学生、調査員、軍人と、様々な身分で中国へ渡航した。具体的には以下の通りである。

【第一回目】
1932年８月。朝鮮満州見学旅行。外務省対支文化事業部。現地解散後、北京へ私費留学。主な訪問地は長春、大連、北京。「会」成立前のため、本誌での報告はなし。
【第二回目】
1937年10月～1939.10。外務省文化事業部の第三種補助金を利用するもの。語学研修の名目で、北京へ留学。本誌での報告は：★「北京通信」（第33号、1937.12．1）★「北京通信・二」（第34号、1938．1．1）★「周作人随筆集・北京通信の三」（第42号、1938．9．1）★「二年間（黙することの難ければ)」（第57号、1939.12．1）
【第三回目】
1942年２月～1942年４月。回教圏研究所より「回教徒団体及回教調査機関との連絡並に調査」のため、中国出張。主な訪問地は北京、張家口、厚和、包頭、大同、太原、開封、徐州、南京、上海、蘇州、杭州など。本誌での報告：★「旅日記抄・一」（第85号、1942．7．1）★「旅日記抄・二」（第86号、1942．8．1）★「旅日記抄・三」（第87号、1942．9．1）★「旅日記抄・四」（第89号、1942.11．1）
【第四回目】
1943年12月～1946年６月。召集令状を受け、中支派遣独立混成第一七旅団補充要員となり、現地へ。主な訪問地は湖北、湖南など。「会」解散後のため、本誌での報告はなし。

1937年10月、日中戦争勃発直後にもかかわらず、竹内好は北京に留学した。留学の目的について、竹内は以下のように述べている。

> 私は自分が歴史の目撃者になることを予感した。そして自分が押し流されないための、全体を見通せる視点を確立したいという要求をもった。私は留学という特権を利用して、戦乱の外にいて、戦乱の全体をつかみたかった[11]。

このように竹内は、歴史の目撃者として中国の現実を俯瞰するという気持ちを抱き中国へ渡った。しかし、占領下の北京は一変していた。第34号（1938．1．1）の「北京通信・二」には、竹内が予想していた北京と現実の北京を対照的に描いている。

北京の空気は今以てまことに長閑であります。（略）老舎が好んで描いたやうな、あの怠けものの学生たちの姿は今は殆ど見えなくなりました。（略）嘗ては夜ごとそこに集會が催され、昼間講堂で睡足りた学生たちは夜を徹して怒号し、放歌し、茶碗をなげあつた、（略）――かうした愉快な光景をひそかに空想に描いて一夜公寓の門扉に耳をよせてみても、恐らく聴えるものは鬼哭に似た風の騒音ばかりでありませう。薄暗い軒燈の蔭を注意深く辿ると、「専租学員」と書いた黄銅の招牌の旁に、（略）「日本の方を歓迎します」といつた拙い文字が目にとまるかもしれません[12]。

記事に見える老舎（ろうしゃ）[13]は、1927年に長編小説『趙子曰（チャオツーユエ）』を発表した。五四運動の後の北京を舞台とした『趙子曰』において、大学紛争に巻き込まれた大学生たちの様々な形相と退廃的な生活が描かれた。竹内は、北京留学中にこの小説を読み、その中に「書かれた北京の学生生活は極めて良い」[14]と、動乱する社会に暮らす学生たちの様子に対する関心の強さをうかがわせた。「戦争の伴う急激な文化の相克、交流」[15]の光景を期待した竹内は、おそらく戦乱の激流における学生生活を現地文化の一種として想像したのだろう。しかし、北京が占領された後、知識人や教育機関などがほとんど南下し、北京はほぼ抵抗なく日本化され、「戦争に遠ざかる」[16]異空間のようになってしまった。彼がこの予想と遥かに違う異空間の中に深く感じたのは、「政治」の力である。これは、彼の「北京通信」から確認できる。

僕は来る途々、たとへていへば路傍の一木一草にも政治を感じた。日本のやうな機構の複雑化した、それだけ擬制の多いところから、事實上の軍政の地へ来てみると、この印象はまことに歴々としてゐる。軍事と政治と文化とは、あたかも一本の触手の如く動いてゐるのだ[17]。

竹内は日本を「擬制の多いところ」と呼び、そして「軍政」に支配された中国に来てみることによって、政治的な権力による抑圧感に直接的に触れ合ったと言えよう。前述した事変後の北京の平穏な空気は、あくまでも「政治」によって作られたものであり、竹内の目に映った北京は、まさに擬制されたものと感じられたのである。そのため、彼の中に以前から形成されていた中国文学への認識は、徐々に動揺し始めた。例えば、「会」の発足した頃、竹内好は中国の小品文[18]に非常に興味を示した。第１号（1935. 3．5）に掲載された彼の「今日の中国文学の問題」では、第一項目として「小品文の盛行」が挙げられ、さらに、第６号（1935. 8.25）、第７号（1935. 9.25）は二号連続で「現代小品文特輯」として刊行された。しかし、竹内は現地に着いた後、それまでの小品文への認識を以下のように反省している。

僕らはよく小品文を問題にしました。僕などは、それは政治と文化の乖離――文化意識の遊離と見、そこから中国文学の特異な性格を導き出さうと企てた一人です。この態度は、今ははつきり言へませんが、間違つてゐないにしても、何か足が大地につかない不安なもどかしさを

次第に感じて参ります[19]。

つまり、元々政治と文化は個別のものと考えていた竹内は、現地の風景を目の当たりにして、政治と文化との緊密な関連を痛感する。そして彼は留学前に理解していた「中国」にさえ不信感を募らすこととなった。たとえ「小品文」が一見個人趣味を重視する文学だとしても、その中に、本当に政治の力は隠れていないのだろうか。また、もし「小品文」は「政治と文化の乖離」ではないなら、その中に読み取れた「中国」は真実とは言えないのではないか。このような思想変化に対して、彼は、以下のように自分の無力感を吐露している。

> 僕らがやりたいと思ったこと、それだけを生涯の祈願として必死に守りおおせると思ったことを、支那事変はこともなげにやってのけた。（略）無力である。完全に無力である。いまに国民の全部が、その目で支那を見るだろう。僕らが、自分だけに愛し自分だけに知りうると思い、それゆえ矜りをもちえた支那が、日常茶飯事になろうとしている。支那は堕落する。怕ろしいことである[20]。

このように竹内は、中国を自分だけが愛し自分だけが知るものとして独占し「領有」しようとした[21]が、日中戦争の勃発により、多くの日本人が中国を注視するようになり、日本人にとって日常的な存在と化した。また、北京の日本化と擬制された泰平さに、竹内は文学だけを通して、中国を理解することに限界を感じたと同時に、自分の今までやり続けた中国研究に無力感を覚え、「支那は堕落する」と慨嘆せざるをえなくなった。そして「北京日記」からも確認できるように、彼の二年間の北京留学生活は、「酒をのんでバカ遊びをするだけにおわってしまった」[22]のである。

竹内好は、戦争中の留学生活において、結局「戦乱の全体」を把握するには到らなかったが、彼の現地報告から読み取れるように、彼自身は日中戦争における歴史の目撃者となった。北京で目撃した風景によって、彼は同時代の中国文学に対して不信を抱くようになり、文学による中国理解の無力感を覚えた。と同時に、彼の政治的な自覚が促されたと考えられる。これもまた、彼の帰国後の中国研究の再出発に大きな影響を与えることとなったのである。具体的事例については次章に譲り、ここでは現地体験によって生じた竹内の政治的な無力感について指摘しておきたい。

（二）「人間」と文化喪失：武田泰淳の戦場体験

他方、東京帝国大学で同期の竹内好と交遊のあった武田泰淳は、一兵士として、竹内とほぼ同じ時期に中国へ渡航した。以下は終戦までの武田泰淳の訪中歴である。

【第一回目】

1937年10月～1939年10月。召集令状をうけ、輜重兵の二等兵として上海へ。主な訪問地は上海、杭州、南京、武漢、南昌など。本誌での報告：★「戦線の武田泰淳君より――増田渉宛」

（第41号、1938. 8．1）★「土民の顔」（第44号、1938.11. 1）★「北京の輩に寄する詩」（第44号、1938.11. 1）★「美しき古書」（第50号、1939. 5．1）★「支那文化に関する手紙」（第58号、1940. 1．1）★「杭州の春のこと」（第59号、1940. 2．1）★「支那で考へたこと」（第64号、1940. 8．1）

【第二回目】

1944年６月～1946年４月。徴用のがれのため、中日文化協会に就職し、上海における東京文化編訳館で仕事。本誌での報告はなし。

本誌に掲載された武田泰淳の現地報告は、一軍人としての訪中の内容に集中している。そして彼の現地報告からうかがえるように、彼が戦線で最も注意深く観察したのは「人間」である。

出征前の武田泰淳の「人間」への理解は、中国の民衆文化への関心からうかがえる。元々「学者志望」[23]であった武田が、最初に本誌に投稿した論文は「中国民間文学研究の現状」であり、その冒頭で、1928年の嶺南大学学術研究会における顧頡剛の講演稿を引用し、中国の民衆文化の重要性を強調した。

> 民衆は活きた文化を創り出すために努力したのに、彼等は永い間、深い闇の中に埋れ、何人もそれを理解するものはなかった。我々は民衆文化を聖賢文化と平等に研究しなければならない[24]。

武田が理解した中国民衆は、活きた文化の創作者であり、それによって、民衆に関する文化は、古典の「聖賢文化」と同じ地位に置かれるべきであると指摘した。そして彼が注目した民衆文化は、情歌、生活歌、滑稽歌などのような地方の歌謡であり、または孟姜女故事や梁山伯と祝英台の物語などの古典神話伝説であった[25]。その後、彼は続々と民衆文化に関する論文を発表した[26]。例えば「中国西南地方蕃人の文化」[27]は、広東や福建などの「蕃人」を地方の歌謡と関連させながら考察したものであり、また、「河北省実験区「定県」の文化」[28]の中で、武田は当時の実験区としての定県[29]に注目し、農村教育を初め、農民参加の出版や演劇などの文化活動を紹介した。要するに、武田泰淳が最初に理解した民衆文化は、地方歌謡・神話伝説などと深く関連した浪漫的・古典的な文化のありようであり、その後、彼の視線は徐々に「実験区」で農村文化を建設していた農民達の姿へ移っていくのであった。

しかし、現実の民衆はどうであったのか。武田は、中国に到着したばかりの風景について、回想でこのように語っている。

> 上陸したとき最初に目にはいったのは、中国人の死骸だった。軍服をつけている死体はまるで見当らなかった。すべて中国の民衆のものだったと思う。これにはおどろいた[30]。

また、彼は中国の民衆について、以下のように語っている。

> 我々は極端な表情をしているくせに心が少しも動揺してゐないらしい農夫を澤山見ました。泣いたり喜んだりしてゐても眼は何處か異常なところをみつめてゐます。土民の顔は黒く日焼けし素朴に見えますが彼等の心は青黒く深い潭のやうです。子供でさへ何といふ鋭い智慧のはたらきを蔵してゐることでせう[31]。

「古典を讀んで」[32]中国に踏み込んだ武田にとって、現地の「死体」となった「民衆」、あるいは「心は青黒く深い潭のやう」な「おそろしい人間」は衝撃的な存在であった。そのため、ここから読み取れる武田の「支那人」観について、岡山麻子氏の「武田は「支那人」を、具体的政治状況の中で見せる表情の奥に、状況を超越する精神を内包した者と見ている」[33]という主張は確かに首肯できる。ただし、ここで筆者が強調したいのは、武田の言った「支那人」を通して、彼の「弱者」としての思考様式が読み取れるということである。

この点について、戦後、堀田善衛との対談の中で彼自身はこのように述べている。

> 武田：その百姓たちがね、ぼくたちを見る眼が、こいつら、たいしたことはない、自分たちのほうがずっと優秀である、という眼なんだよ。（略）こっちは武器をもってるし、むこうはもっていない。そうすると、向うは遠巻きにして笑って見ている。（略）それはもう、農村文化っていうものが、非常に強いっていうかな、日本人がなにいったって、蚊がとまったほどにも感じなくて、最後にはむこうが勝つということ、のみこんじゃうということね[34]。

前述したように、神話や歌謡などの古典文化を創り出した中国民衆に対して、出征前に武田は、一種のロマンティシズム的な視線を持ち続け、彼の目には、民衆が存在するからこそ、このような原始的且つ古典的文化の存続があり得たのではないか。しかし、現地で「半年ぐらい毎日死骸を見た」[35]武田にとって、何よりも衝撃的だったのは、その文化を創出する主体がなくなったことである。

一方、武田が現地で見た日本軍に対して「心が少しも動揺していないらしい農夫」たちは、惨めな戦争という政治状況の下に、泰然として生きている「強者」であった。一方的な理由で、中国に侵略した日本軍が、逆に「弱者」的な立場になってしまうと彼は痛感したのである。これは彼が帰国した後、中国研究における「人間」に注目する重要性を強調する所以となったのである。

したがって、出征後の武田泰淳は、神話や歌謡などの古典大衆文学によって形成された浪漫的な中国文化観を、目の前の中国人の様態によって形成された現実的な中国文化観へ転換したのである。これは、彼の「支那文化に関する手紙」で明白に記されている。

> 日支親善のすべての機關、支那研究のための著書、それ等の文化的なものが我々には何となく影が薄いもののやうに見えて仕方ないのです。我々が戦地で見た支那土民の顔には土の如き

堅固な智慧があらはれ、伝統的な感情の陰影が刻まれ、語られたことのない哲學の皺が深々とよつてゐました。その顔があまりに鮮明に眼の底にとどまつてゐるので、活字になつた支那評論が色あせて見えるのですね[36]。

続いて述べられた彼の漢口の中山公園での経験からもこの点についてうかがえる。

土地土地の支那人に接する回数が多くなるにつれ私の支那文化に対する考へも変わつて来ました。（略）公園には遊びたはむれる子供もなく、（略）池には浮いたボートには乗る人もなく赤く塗つた八角の亭には語る男女の影も見えませんでした。（略）私が見てゐるのは人のゐない公園の光景でありました。（略）しかし此が文化なのであろうか[37]。

つまり、いわゆる「日支親善のすべての機関」、「支那研究のための著書」などのような、現地の人間を見ずに行われた研究は、異文化理解としての内実を備えておらず、存在感が薄いものである。そして武田の現地での「人間」との接触は、活きている人間だけではなく、彼の現地で見た死骸、あるいは人なき公園も含まれていると考えられる。文化を創出する主体は、結局「人間」である。武田泰淳は現地の「人間」から衝撃をうけ、それまでに形成された中国文化に対する認識も次第に崩壊してしまった。そのため彼は、真の「中国」を理解するために、目の前に生きている「支那人」に注目すべきであると認識したのである。

このように、竹内好と武田泰淳との現地体験を照らし合わせれば、彼らが共通して感じたのは、中国渡航前にイメージしていた中国の崩壊である。竹内は、「思想の衝突」を求めに中国へ行ったものの、みじめな戦争の跡の代わりに、「政治」による擬制された平穏な北京の空気を身に沁みて感じた。日本化された北京で、おのれが守ろうとした「中国」は、違う形で日本人の「日常茶飯事」となっていた。

一方、武田は、戦地における混乱した風景と、現地の人間との接触によって、それまでの蕃人の歌謡や古典の神話伝説から目覚めつつ、「文化とは何か」と自問していた。その中で、彼によって重要視されたのは「人間」への探求であった。

現地での体験により、竹内と武田が抱いていた中国像が崩壊し、現地で支配者たる彼らにとって、いかに「中国」に直面するかという問いが浮かび上がってきた。また、これは帰国後の二人の中国研究の再出発の源となったのである。それは、帰国後の二人の見せた中国研究に対する異なる態度からうかがえる。

三　竹内好と武田泰淳の交錯：「政治」と「文化」の間

1939年10月に帰国した竹内は、翌月に研究会の改組と『中国文学月報』の改革を準備しはじめた。第57号（1939.12.１）に掲載された竹内の「二年間――黙することの難ければ」を見ると、本誌の改革をめぐって、竹内と武田が反対の立場に立っていることが確認できる。

某日、武田云ふ。君の月報を政治的に転換しようとする意図には賛成出来ない。我々は今が如何に不調な時代でも月報自身の持つ意味がそのために将来の約束に関してまで無益になつたとは思はない。つまり我々は今のまゝで、今より遥かに多く果さねばならぬ仕事を残してゐる。あくまで文化的でいゝではないか[38]。

帰国後の竹内の意図した「政治的転換」について、彼の「北京日記」（1940）からその一端がうかがえる。

２月４日（日）夜
（略）この時の長野（筆者注:長野賢）の話、午后から夕方までしゃべりつづけて、日本の現状、将来の見透しを彼一流の政治的解釈で一席やった。（略）長野の描いている夢は、それを文字で形象したら、すばらしい文学になるだろうと思う。俺はそういう仕事をしてみたい。無論長野の夢は政治を手段としなければ描かれまい。それを文字を手段にした夢に移すことは出来ぬものか。（略）俺は俺の内にあるもやもやしたものを形象したい[39]。

竹内が、長野賢と語り合った具体的な内容については、管見の限りでは見つけられなかったが、彼が竹内に語ったのは、日中関係、または日本の中国研究の「現状」と「将来」に関する政治性の持つ意見ではなかったかと推測できる[40]。この日記の中で竹内は、自分の内にある「もやもやしたもの」を形象したいと記しているが、それは何を指しているのだろうか。同日の日記では、このような一節が見られる。

武田、このごろ不思議な気持を訴える。何が何だかわからなくなったようだと云う。文化の基礎がゆらぐ気持だろうと思う。そう云われて、武田が近ごろ書いているものが単に支那に対する愛情の疑いだけでないのがわかった。不安と云うものであろう。俺はそれを目黒村の不安と名付けた。何をしていいかわからなくなった気持[41]。

竹内の感じた武田の「不安」は、前述したように、武田の現地体験によって生じた日本の中国研究の現状に対する不安である。そして、当時の「会」の事務所は竹内の自宅でもある東京目黒区に置いたため、文中の「目黒村」は実に「会」を指しているのではないかと考えられる。換言すれば、竹内の感じた武田の「不安」は、実に「会」全体としての実状であろう。このように、竹内の「もやもやしたもの」は、彼が感じた武田の「文化の基礎が揺らぐ気持ち」であり、また彼自身が志す中国研究の改革をめぐる不安ではないかと考えられる。

彼は、武田泰淳と違い、平穏な北京で自分に本音を言える「人間」との接触すら思うとおりにできなかった。例えば、第34号（1938．１．１）の「北京通信（二）」では、竹内はこのように述べている。

かへすがへすも残念なのは、事変前に来て抗日の実状を目のあたり見られなかつたことです。たとへば家一軒借りるものも容易でなかつたといふ話です。しかし、人間と人間とがどんな眼付をして憎しみあつたかは誰も話してはくれません[42]。

ここから分かるように、竹内好が求めているのは、日本の侵略に直面する中国人の行動と思想のありようである。「家一軒借りるものも容易でなかった」状況が、中国人の日本人に対する抵抗の証であったのであろう。かかる状況下で彼はその時局に関する心情を語ってくれる中国人に、果してどのぐらい出会うことができたのであろうか。

竹内好の北京時代の日記に、頻繁に登場する一人の中国人がいる。それは楊聯陞という人物で、竹内自身も当時「一番親しくつきあった」[43]友人であった。この最も信頼していた友人との間でさえ、「黙契のようにお互いに時局については一言も口にしませんでした」[44]という。このように、政治に翻弄された北京で、中国人の本音を読み取れなかった竹内は、「だんだん支那、支那人、支那文学がいやになつてき」[45]て、中国文学作品にも不信感を抱くようになった。留学前、竹内は誌上において中国近代文学を中心に投稿していたが、留学後は、中国近代文学ではなく、寧ろ日本における中国研究の方向性に関心を寄せるようになった。つまり、帰国後の竹内は、政治と文化との「分ち難い」関係を現地で知ることとなり、文学作品だけでは真の中国文化は理解できないと痛感するようになる。そのため、日本国内に依然として残っている現地から目を逸らしていた中国研究に批判の目を向けるようになった。

一方、前掲した「二年間――黙することの難ければ」に見える、武田泰淳の「文化的でいいではないか」という主張は、彼が見た現地の中国から生まれたものである。武田の言った「文化的」というのは、彼の現地で見た「人間」と深く関連している。前述したように、武田が現地報告の中で最も言及したのは、現地の「人間」であるが、彼は、第58号（1940．1．1）の「支那文化に関する手紙」において、以下のように述べている。

多数の兵士が支那で生活して帰つて来たといふ事は（略）生活の問題なのであつて、それは言ひかへれば文化の問題だと思います。（略）兵士達は論文を発表し書を出版するために研究しませんでした。しかしながら日本の軍隊のために、その目的のために、彼等は支那人を知らなければなりませんでした。（略）私は日本に帰つて驚いたことは支那関係の出版の華やかさでありました。しかし今はその空しさに驚かずにはゐられないのです[46]。

兵士は無論、研究のために中国へ行ったわけではない。しかし、中国での暮らしによって、彼らは内地の研究者に比べ、より現実的な中国を知ることができる。つまり、武田の「文化的」な再出発は、現実的な中国、および中国人の生き方に注目することによって、中国の真実を再認識することだと考えられる。そして、彼の帰国後の文章を見てみれば、この主旨が彼の作品に一貫されていたことが確認できる。例えば、第73号（1941．6．1）に掲載された「山西開発展を観る」は、山西

の風景と人の生活を主題とする展覧会を見た武田の書いた感想である。その中で、彼は、中国農村の原風景を再現する展覧会の意義について、以下のように書いている。

> 支那学とは別に、何か「支那」を身近に感ずる装置が出来なければ、到底この複雑かつ強烈な印象にぶつかつて行くことはできないのではないか。もう何かしら、今までの研究や学問を嘲笑するやうな現実が充満してゐるのではないか。（略）会場の隅に、無造作にたてかけられた頑丈な耕作用の犂、その犂一本にまさる影響力を持つた文章を書くためには、支那学者は十年の心血を注がなければなるまい[47]。

「日支親善のすべての機関」[48]などが、現地の惨状を目撃した武田にとって「影が薄いもの」[49]であり、中国現地の「犂一本」は、学者が十年間にわたって心血を注いだ成果にも匹敵するとまで指摘している。浪漫的・古典的な民衆文化に関心を抱いていた武田は、帰国後の再出発として、現実の中国風景、および生きている人間を念頭に置く「文化的」な中国認識を求め、新たな中国研究のスタイルを提言しようとしているのではないか。

竹内の「政治的」と武田の「文化的」は、一見対立的な立場であるが、実に裏に両者に通底するものであった。例えばこれについて、竹内は

> 中国人に対して連帯感があるんですよ。自分は日本人ではあるが、日本政府なり日本の権力なり日本の支配的なジャーナリズムに対して局外者であるという被害者意識、そういう点は同じ被害を受けている人間としての共通感がある。（略）戦争は強制されていくものだし、鉄砲も撃たなければいけないのですが、その極限で自分がどうすべきかという問題は心の底にあった。私にもあったし、武田にもあったと思う[50]。

と述べている。この一文は、表には竹内が認識した日中戦争は「弱いものをいじめ」[51]的行為であり、中国はこの戦争の被害者であったという意味を読み取れるが、裏には二人の現地体験によって生じた「弱者意識」が表現されている。ただし、二人の「弱者意識」には異なる内実が存在する。竹内の場合は、平穏な北京の空気を通して、戦争における権力という政治的な支配力の強さを自覚し、その支配力の下で自分が求めていたジャーナリズムは中国と同じ被害者であったと彼は認識した。一方の武田の場合は、戦場で「強者」としての中国人を目撃した。彼の文章では、竹内のような中国に対する同情的な感情は看取できない。しかし、彼は現地で「百姓」の強靱さを体感することで自分の弱さを認識し、次第に現地を無視する中国研究の空虚さと脆弱さへと自覚が転換することとなった。このような帰国後における二人の思想的な変化は、中国滞在中に置かれた異なる状況の中に、自分のできることが何であるかという問いへの答えではなかろうか。

四．おわりに

本稿は、『中国文学月報』（『中国文学』）に着眼し、1937年～1939年の竹内好と武田泰淳の中国体験を考察した。これによって、今まで見られなかった二人の中国認識の連帯性を明らかにした。

留学生として見た竹内の中国は、予想と正反対な泰平な風景であり、彼は政治と文化との緊密性を認識したことによって、それまで築き上げた中国文学への理解が覆された。文学への不信を感じた竹内は、帰国後、政治的な再出発として、国内の「支那学」の改造に取り組むようになった。

そして兵士として渡航した武田が、戦場の風景と人間への観察を通して、出征前の彼の古典的・浪漫的な民衆文化観を再構成した。帰還後の武田が、何よりも重視したのは、現実の中国と中国人に注目したうえでの中国認識の形成である。これも彼は竹内と対立し、改革後の雑誌の方向が、「文化的」でなければならないと主張した所以である。

竹内好と武田泰淳は、異なる立場で異なる中国を目撃したが、彼らの中国認識の接点は、彼らの元々抱いていた中国観の崩壊にある。そして、竹内と武田は、それぞれ再出発した後、一人は「政治」へ、もう一人は「文化」へと異なる方向に向かっていたが、それぞれが再構築した中国観は、実に現地で形成された二種の「弱者意識」にもとづくものとして把握することができる。

竹内好は、1942年２月に再び調査員として中国の北京をはじめ、南方の蘇州や杭州にまで訪問している。そのため彼の二回目の訪中体験について、北京時代の留学生活と関連しながら考察する必要があると考えられる。また、武田泰淳も1944年６月からの二年間、上海における東京文化編訳館に勤務し、前回とは異なる立場で中国を観察することとなる。二人の心境は更にどのように変化したのかについて考察する必要もある。

なお、1943年武田泰淳は『司馬遷』を、1944年竹内好は『魯迅』を、それぞれ「東洋思想叢書」の一冊として刊行した。この二作は、彼らの中国認識を濃縮した名作として今日に至っても高く評価されている。その中に、彼らの1937年～1939年の二年間の体験がいかに反映され、題材の異なる二作の間に連帯性が存在するかどうか、これも今後の課題として考察を試みたい。

注

1　研究会及び本誌の詳細について、立間祥介「中国文学研究会年譜」（『復刻中国文学別冊』汲古書院、1971）、竹内好「中国文学研究会結成のころ」（『竹内好全集（15）』筑摩書房、1981）、竹内好・武田泰淳「「中国文学」のころ―時代、人びと、そして私―」（『武田泰淳全集（別巻二・対談）』筑摩書房、1979）、竹内好・高橋和巳「文学　反抗　革命」（『状況的：竹内好対談集』合同出版、1970）などを参照されたい。

2　本誌は戦後の1946年に一度復刊されたが、本稿では、復刊後の内容が含まれない。

3　竹内好「後記」（『中国文学月報』第５号、1935. 7.15）。

4　拙稿「『中国文学月報』から見た近代日本知識人の中国文学認識―」（『国際文化研究』19、2013）を参照されたい。

5　幼方直吉「北京・上海における竹内好の生活とその意味」（『思想の科学（六次）』思想の科学社、1978. 5）。幼方氏は、竹内好の「人間は等質」という人間観は、彼の中国体験に由来するものと指摘しているが、現地報告の分析は充分行われていない。

6　安田武「武田泰淳の文学とひとつの謎―その戦争体験について―」（『文学』29巻12号、岩波書店、1961）。

安田武「武田泰淳の文学とひとつの謎（完）―その戦争体験について―」（『文学』30巻４号、岩波書店、1962）。

安田武氏は、武田が戦場で目撃した「殺人」「風景」「屍体」「死」が、どのように彼の小説に表現されたかを分析し、「戦争体験を通して、人間存在における死の圧倒的意味と対決し…（中略）…つきつめていった過程は、戦争をくぐり抜けた日本の、その民族的な体験の思想化というテーマにそって、重大な意味をもつ」と主張した。

7　大原祐治「北京の輩と兵隊――「中国文学月報」における竹内好・武田泰淳」（『学習院大学人文科学論集』11、2002）。大原祐治「羅漢と仏像――雑誌「中国文学」における竹内好・武田泰淳」（昭和文学会『昭和文学研究』45、2002）。

8　渡邊一民『武田泰淳と竹内好』（みすず書房、2010）。

9　前掲書渡邊一民『武田泰淳と竹内好』、318頁。

10　近年の竹内好と武田泰淳の現地体験に触れた研究は、先述したもの以外に、岡山麻子『竹内好の文学精神』（論創社、2002）、王俊文「一九三八年の北京に於ける竹内好と「鬼」の発見――ある「惨として歓を尽くさず」の集まりを中心として」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』10、2007）、岡山麻子「武田泰淳の文化論――日本近代文化への視座と『司馬遷』」（『近代日本研究』26、2009）、王俊文「中国戦地の風景を見つめる「喪家の狗」――武田泰淳の日中戦争体験と「風景」の創出」（『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』10、2011）、川西政明「武田泰淳と安徽省のＫ村」（『新・日本文壇史（６）』岩波書店、2011）などが見られる。

11　竹内好「わが『戦争と平和』」（『竹内好全集（13）』筑摩書房、1981、48頁）。初出：1962年４月25日発行『世界文学全集（21）』「トルストイ『戦争と平和』Ⅰ」（河出書房新社刊）の月報21号に発表。

12　竹内好「北京通信（二）」（『中国文学月報』第34号、1938．１．１）。

13　老舎：（1899～1966）中国の小説家、劇作家。本名は舒慶春。1918年、北京師範学校を卒業後、方家胡同小学校長に任じ、1923年、北京教育会で平民教育の仕事をしつつ、市立第一中学で国文を教えた。1924年ロンドン大学東方学院に中国語教師として渡英。在英中に発表した長編小説「老張的哲学（張さんの哲学）」（1926）、「趙子曰」（1927）、「二馬（馬さん父子）」（1929）で独自のユーモアと風刺の作風を確立。

14　丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』（東京堂出版、1985）、310頁～312頁を参照。

竹内好は1937年の日記でこのように記している。

十一月三十号（礼拝二）

十一月的最后一天了。上午杨君来。下午念老舍的『趙子曰』写着北京的学生生活很不错。（略）

訳文：（原文は中国語、筆者訳）

十一月三十日（火）

十一月の最後の日。午前、楊君来る。午後、老舎の『趙子曰』を読む。書かれた北京の学生生活は極めて良い。（略）

「北京日記（1937年）」（『竹内好全集（15）』筑摩書房、1981、183頁）。

15　竹内好「北京通信」（『中国文学月報』第33号、1937.12．１）。

16　前掲文竹内好「北京通信」参照。

17　前掲文竹内好「北京通信」参照。

18　「中国で一九三〇年代に林語堂が提唱した散文のジャンル。英文学のエッセイと明代文人のスタイルをもとに，個人の趣味・風格を重視した。「人間世」「宇宙風」などの専門誌も出し，知識人の一部に歓迎されたが，趣味に流れ文人の世界にこもるきらいがあり，魯迅は現実からの遊離を批判して，むしろ現実批判にこそその発展の可能性があると指摘した。しかし周作人などの作品は，中国現代の散文における魯迅の〈雑文〉の対極として独自の存在をなす。（丸山昇）」『世界文学大事典』（集英社、1996～98）。

19　前掲文竹内好「北京通信（二）」参照。

20　竹内好「佐藤春夫先生と北京」(『竹内好全集（14)』筑摩書房、1981、289頁～290頁）初出：『文学通信』八、ぐろりあそさえて刊、1942．2。

21　竹内好の中国「領有」に関して、大原祐治の「羅漢と仏像――雑誌「中国文学」における竹内好・武田泰淳」を参照されたい。

22　前掲文竹内好「わが『戦争と平和』」49頁参照。

23　竹内好・武田泰淳「「中国文学」のころ」(『武田泰淳全集（別巻二・対談)』筑摩書房、1979、248頁)。

24　武田泰淳「中国民間文学の現状」(『中国文学月報』第５号、1935.７.15)。

25　前掲文武田泰淳「中国民間文学の現状」参照。

26　「武田泰淳年譜」によると、出征前に「民衆文化」に関して、主に以下の論文が見られる。

①「中国民間文学研究の現状」(『中国文学月報』第５号、1935.７.15)

②「中国西南地方蕃人の文化」(『同仁』1935年10月号と11月号)

③「批評と紹介『山歌』」(『中国文学月報』第11号、1936.３.５)

④「河北省実験区『定県』の文化」(『中国文学月報』第12号、1936.３.25)

⑤「唐代仏教文学の民衆化について」(『中国文学月報』第13号、1936. ４.17)

⑥「猺人と釁型儀礼――『漢学会雑誌』の二論文について」(『中国文学月報』第16号、1936.７.１)

27　初出：雑誌『同仁』の1935年10月号と11月号。『武田泰淳全集（11)』に収録。

28　初出：『中国文学月報』第12号、1936. ３.25。『武田泰淳全集（11)』に収録。

29　1920年代、晏陽初（1890～1990）は中国で平民教育運動を発起し、河北省の定県が実験区と指定された。1937年の日中戦争勃発まで、学者、知識人達は定県に入り、農村の教育発展と文化力向上に取り組んでいた。

30　武田泰淳「中国人と日本人」(『武田泰淳　身心快楽　自伝』創樹社、1977、220頁）初出:『サンデー毎日』1971. ５．９。

31　「土民の顔」(『中国文学月報』第44号、1938.11.１)。

32　武田泰淳「戦線の武田泰淳君より――増田渉宛」(『中国文学月報』第41号、1938.８.１)。

33　岡山麻子「武田泰淳の文化論――日本近代文化への視座と『司馬遷』」(『近代日本研究』26、慶應義塾福沢研究センター、2009、107頁～108頁)。

34　武田泰淳・堀田善衛『対話　私はもう中国を語らない』(朝日新聞社、1973、43頁)。

35　前掲書武田泰淳、堀田善衛『私はもう中国を語らない』、38頁参照。

36　武田泰淳「支那文化に関する手紙」(『中国文学月報』第58号、1940.１.１)。

37　前掲文武田泰淳「支那文化に関する手紙」。

38　竹内好「二年間――黙することの難ければ」(『中国文学月報』第57号、1939.12.１)。

39　竹内好「北京日記」(1940)（『竹内好全集（15)』筑摩書房、1981、386頁、388頁)。

40　長野賢は、本誌において、「蕭軍のヒューマニズム」(第29号、1937. ８．１）などの中国近代文学に関する論文を掲載しているほか、本号の「後記」で紹介されたように、彼は北平で黄土層社という文学団体の同人であり、少なくとも長野が中国研究に関連する人物であることには相違ない。

41　前掲文竹内好「北京日記」(1940)、387頁～388頁参照。

42　前掲文竹内好「北京通信（二)」参照。

43　竹内好「中国と私」(『竹内好全集（13)』筑摩書房、1981、220頁)。初出：1950年５月号『近代文学』(第５巻第５号、近代文学社刊）の「特集・世界の知識人へ」の一篇として発表。

44　竹内好「中国人のある旧友へ」(『竹内好全集（13)』筑摩書房、1981、63頁)。初出:1969年２月号『未来』（未来社刊）に「著者に聞く10」として発表。

45　「竹内好（北京東四七条胡同四三）から松枝茂夫（東京都杉並区荻窪一―五〇）へ（〔昭和一三年〕一〇月一二日)」(井上光晴編第三次『辺境』５、1987.10)。

46　前掲文武田泰淳「支那文化に關する手紙」参照。
47　武田泰淳「山西開発展を観る」(『中国文学』第73号、1941.6.1)。
48　前掲文武田泰淳「支那文化に関する手紙」参照。
49　前掲文武田泰淳「支那文化に関する手紙」参照。
50　前掲文竹内好・高橋和巳「文学　反抗　革命」、38頁～39頁参照。
51　前掲文竹内好・高橋和巳「文学　反抗　革命」、39頁参照。